様々な関わりを通して

社会福祉学部社会福祉学科２年　堀田　沙希
活動先：NPO 法人　チャレンジド
クラス：野尻　紀恵　先生

これまでの私は、ボランティアの経験もほどほどに、意欲だけが先走っている状態が長く続いていた。やりたいことはあるのに、最後の一歩が踏み出せない。やろうやろうと先延ばしにしては仕方がないと諦めていた。SL においても、始めはあまりやる気がなかったというのが正直なところだ。しかし、夏休みの 6 日間の活動で、これまで一歩を踏み出さなかったことを後悔した。6 日間の経験は、私の利用者に対する意識以外にも、企画をする側としての準備の重要性など多方面にわたって成長の機会となった。そんな私の中での大きな変化、そして SL を通しての自分の成長と気づきについて述べたい。

私の活動先であるチャレンジドでは、主に子どもたちの放課後支援活動に参加させていただいた。その日によって違うスケジュールのなか、色々なところに出かけた。活動を通して見えてきたのは、子どもたちそれぞれに違う表情、性格であった。様々な障害を抱える子どもたちであるため、障害による特徴もあるのだが、性格や好みでもはっきりとした違いが見えてくる。また叩いたり、イライラして荒々しい言葉が出たり、ほかの子だと怒る場面かもしれないが、それはその子なりのサインやルールに則ったコミュニケーションである場合がある。もちろん最初からそのような違いが見えるわけではない。遊び、触れ合い、ともに長い時間を過ごすことでやっと見えてくる部分なのである。私たちは班のメンバー全体を見てもなかなか時間が合わず、前もって勧められていた事前訪問があまりできなかった。その事前訪問を多くできていたらもっと子どもたちに対する理解を深め、その後の夏祭りの企画も幅広く行うことができていたかもしれない。そのような関わりを通して個々の子どものことを知る必要性もチャレンジドで学んだことの１つである。

また理解を深める以外にも、触れ合うなかでの注意点も学んだ。私たちは、実習のなかでただ単に子どもたちと楽しく過ごせばいいというわけではない。実習とはいえ、チャレンジドでの行動はいずれ社会に出たときにも影響する。チャレンジドの中だけが子どもたちの生きる世界ではなく、時が来れば子どもたちは社会へと羽ばたかなくてはいけない。そうしたときに、障害があるからという理由だけでは許されないことも出てくるだろう。そのためにも私たち大人が、しても良いことと悪いことの違いは教えていかなくてはならない。一度活動中に、ある男の子がじゃれ合いながら私の首を絞めてきたことがあった。それまでにもチャンバラごっこなどで男の子なりの多少の力の強さを感じることはあったのだが、その時ばかりはテンションが上がっていたのか、あまりにも強い力であったため、制止し、しっかりとその場の行動を叱ることができた。目を見てしっかりと伝えれば、その子も少なからずいけない、ということは分かってくれる。それ自体がその子の今後に繋

がっていくのである。私自身もその場の行動で、なんでもやってあげるだけではだめであるし、伝え方によってもまた変わってくるのだということを知ることができた。

企画では、話し合い、情報交換の大切さが分かる良い機会となった。先に述べたが、班のメンバー同士の予定が合わなかったこともあり、なかなか夏祭りの企画が進まず、それによってチャレンジドへの連絡も同時に遅れてしまった。連絡が遅れることで、指示を仰ぐ機会も減り、段取りの中途半端さから完璧な見通しを立てるに至らなかった。当日、準備物の不足などで出鼻をくじかれたことも、その前準備の怠りが起因していたように思う。そのような企画をする側の苦労を肌で感じ、実際に企画運営をし、子どもたちの喜ぶ姿を見ることができ苦労が報われたことも、私の成長につながったのではないかと思う。

ここからは実習を通して見えてきた地域活動や社会活動について述べようと思う。先に述べた自らの成長にも関係してくるのだが、私は実習のなかで特に「関わり」という面に注目していた。関わりは、私たちと利用者である子どもたちとの間にある関わりだけではない、私たちと職員の間、職員と利用者の家族との間にも関わりは存在する。また、実習を終えてゼミのなかで振り返りを行なった際、私はもう 1 つ「ニーズ」という言葉にも注目した。どのようにしてニーズは生まれ、そのニーズはどのように露見していくのか、疑問は多かった。班ごとの研究としてこの 2 つを深めるなかでまた違った視点が見えてきた。

研究では、最終的にニーズを抱える人々の存在ありきとして、福祉的に捉えることのできる五感と思考、相手にはそれを表出するだけの力、そして関わりを通して生みだすべき信頼関係が必要だという結論に至った。では、その関係のなかですれ違いが起きた場合はどうすればよいのだろうか。例えば 1 組の親子がいたとしよう。職員との信頼関係はすでに形成されているとする。子どもに対し、就労支援を考える時期に入っており、親は当然、子どもにはこんな支援をしてほしい、というニーズを抱えている。しかし、職員は他の人を見てきたそれまでの経験などから、その子に対しては違う支援の方が必要ではないかという考えがある。ここに意識のすれ違いが起こっているのである。チャレンジドによると、このようなすれ違いは実際に起きたこともあるそうだ。価値ジレンマとしても成り立つように思えるこの事例だが、これまで述べてきた内容だけでは、どうしても親側の支援内容が優先されてしまうように思う。しかし、本当にそれでよいのだろうか。ただニーズを把握し、それを充足させるだけでは場合によっては正しい支援とは言えないのではないか。そう思い至ったときに、ここにも関わりが関係してくるのだと気付いた。関わりは信頼関係を形成し、ニーズを表出するためだけに必要なのではない。すれ違いが起こったとき、双方で話し合い、その子にとって何が最良であるか互いに見つめ、探し出していくことがニーズの先にあるミッション、いわゆる使命へと繋がっていくのだと思う。社会活動として事業を行っていると、少なからず、こういったすれ違い、また把握しきれないニーズなども存在してしまうだろう。そのわずかな雫もこぼさないようにするためにも、普段の事業、活動のなかで利用者である子どもたちと関わり理解することや、地域の方々を巻き込んだ、企画や勉強会などがニーズの受け皿となるのだと感じた。

今回の実習では、すべて関わりという軸のなかで、学び、成長することに繋がったように思う。普段から友達、家族、先生など「関わり」は実感しているが、振り返りの中でたどり着いたニーズの把握までには至らない。今の私には、そこまで考えて関わりを持つことは難しい。当分は、相手との信頼関係を結ぶための関わり方を身につけることを目標にしたいと思う。そして実習のなかでの自らの成長をこれからも胸に、人と関わることに積極的になりたいと思う。